

2 1	西尾	西尾市立中畑小学校	マツザキ ナミ 氏名 松崎 七海
-----	----	-----------	---------------------

分科会番号 2 0	分科会名 総 合 学 習
-----------	--------------

テーマ 単元名	自ら学び、ふるさと中畑に誇りと愛着をもつ児童の育成 ～4年総合的な学習の時間 「残したい！伝えたい！地いきのたから」の実践を通して～
------------	--

1 はじめに

本校の校区の方々は、教育活動に大変協力的である。また、校区には伝統的行事など、地域とのかかわりを大切にできる教材がたくさんある。多くの児童は、この恵まれた地域の「人・もの・こと」をあたりまえのように感じている。そこで、地域の郷土芸能「田貫の棒の手」、地域の祭り「中畑のおまん和祭」を題材に授業を展開していくことで、本学級の児童が学びの主体となり、地域の中で地域の人々とともに自分の生活を切り拓いていってほしいと願い、この単元を設定した。

棒の手、おまん和祭は、どちらも100年以上続く校区の伝統的な祭りであり、それぞれ県の無形民俗文化財、市の無形民俗文化財となっている。その背景には、それらを保存し継承しようと活動している方々の存在がある。その一方で、祭りに携わる人々の高齢化や若者離れが進み、存続が危ぶまれている。そこで、児童が地域の伝統を引き継ぎ、次世代に継承していくために、自分たちにできることはないかと考えたり、表現したりする活動を展開する。そして、その学習過程で祭りに関わる人々の願いや努力に児童たちが直接触れることで、地域により愛着をもつことができると考えた。

2 テーマに迫る基本的な考え方

(1) 目ざす子ども像

- ・ 自分で見つけた問題に対し、仲間とともに試行錯誤しながら自らその問題を解決しようとする子
- ・ ふるさと中畑のよさや価値に気づき、誇りに思い、地域に愛着をもって地域のために自分ができることをしようとする子

(2) 研究の仮説と手だて

本研究で目ざす子ども像に迫るための仮説と手だてを次のように考えた。

仮説 1 児童の思考の流れに沿った単元を構想し、児童の振り返りを中心に授業を展開すれば「仲間とともに試行錯誤しながら自らその問題を解決しようとする子」が育つであろう。

【手だて】

- ① 児童の思考の流れに沿うように単元を構想する。
- ② 前時の気づきや疑問を解決できる授業展開になるように、振り返りの視点を⑦「わかったこと・できたこと」 ④「新たな課題・次に考えたいこと」と明確にし、児童の思考の変容が見えるようにする。
- ③ 体験活動を行った後、互いの考えを交流する場面で、視点を絞るための切り返し発問や保存会の方々の思いに迫ることができる資料提示をする。

仮説2 「棒の手」「おまんと祭」を大切に守っていきたいという、保存会の方々の思いに触れ、地域の人々の温かさや、地域のもの・ことのよさや価値に気づくことができれば、「ふるさと中畑に誇りと愛着をもち、自分にできることを考え実行しようとする子」が育つであろう。

【手だて】

- ④ 保存会の方々の思いに気づけるように、地域のたからである田貫の棒の手、中畑のおまんと祭に関わる方々に受け継がれている思いや大切にしていることを語ってもらう場を設定する。
- ⑤ 棒の手、おまんと祭存続のために、自分にできることが考えやすくなるように視点を分けて板書したり、発信方法を考える場を設定したりする。

3 研究の方法

(1) 研究の構想

目ざす子ども像に迫るために総合的な学習の時間「残したい！伝えたい！地いきのたから」を構想し、研究を進める。

児童の活動		
わくわく	地いきに残る古いものに触れよう (第1～3時)	手だて③・④ 地域の郷土芸能や祭りに興味をもつことができるように、おまんと祭で使われる馬と触れ合ったり、棒の手の演技を見たりする。
	・棒の手やおまんと祭はいつ頃から始まったのかな。 ・小さい頃、棒の手やおまんと祭に行ったことがあるよ。	
夢中	棒の手やおまんと祭について調べよう (第4～8時)	手だて③ 調べたことを共有するための話し合いをし、切り返しの質問を講じる。
	・棒の手は、江戸時代の終わりごろに、村の祭りで農民の武芸として伝えられて100年以上も続いているよ。 ・どちらにも、守っていくための保存会があるね。小学生が参加できるのも同じだね。	
	100年以上続いている秘密を探ろう (第9・10時)	手だて④ 保存会の方々の思いに気づけるように、「棒の手」「おまんと祭」を大切にしていることを語ってもらう場を設定する。
もつと	「地いきのたから」のために自分たちができることを考えよう (第11～17時)	手だて⑤ 存続のために、自分にできることが考えやすくなるように視点を分けて板書したり、発信方法を考える場を設定したりする。
	・ぼくたちが参加することで、お祭りを盛り上げたいな。	

手だて①
手だて②
児童の思考の流れに沿うように単元を構想する。
前時の気づきや疑問を解決できる授業展開になるように、振り返りの視点を明確にし、児童の思考の変容が見えるようにする。

(2) 抽出児Aの実態

児童Aは、中畑のおまんと祭に毎年家族と一緒に足を運び、楽しんでいる。田貫の棒の手については、名前は聞いたことはあるものの具体的なことは全く知らなかった。教科の学習では、黙々と一人調べを行い、わかったことを振り返りにまとめることができる。児童Aが、地域の教材を用いて、解決策を考える活動を行うことで、学びを身近なものとして捉え、主体的に問題に向き合い、自分なりの考えだけではなく、仲間と考えを練り上げて問題を解決する楽しさを実感できるのではないかと考えた。

本研究では、児童Aの変容を追いながら手だての有効性について検証していく。

4 実践と考察

(1) 児童の思考の流れに沿うように単元を構想する。(手だて①の検証)

単元を構想するにあたり、驚きや感動から、追究意欲が生まれる教材との出会いを「わくわく」の段階、心を揺さぶる体験活動・思考を深める「夢中」の段階、地域に働きかける活動を「もっと」の段階と名づけた。

「わくわく」の段階では、地域の郷土芸能や祭りに興味をもつことができるように、実際におまんと祭で使用される馬の器具に触れたり、棒の手の演技を見たりした。目の前で繰り広げられる迫力ある演技への驚きや感動から単元をスタートすることができた。棒の手の演技を見せていただいた後に、刀や棒などの道具について説明してもらいながら、触ることができた。児童Aは最前列で身を乗り出して、説明を真剣に聞いていた。資料1はその時の児童Aの振り返りである。初めての出会いから、「棒の手はいつどこで練習しているか」という疑問をもち、もっと知りたいという思いをもつことができた。本物との出会いで心を動かされたからこそ追究意欲が生まれたといえる。

資料1 児童Aの振り返り

⑦私は、棒の手の演技を初めて見たので、いいなと思いました。

⑧いつどこで練習しているかなど、き聞に思いました。

※き聞に思ったことを調べてみたいね。どうしたらいいかな。

「夢中」の段階では、調べ学習室にある資料やインターネットを使って棒の手やおまんと祭について調べた。児童Aは棒の手の歴史について調べていたが、資料だけでは調べたいことがわからず、困って、何度か教員に尋ねに来た。そこで児童Aの感想を次時の授業の始めに取り上げ、どうしたら解決できるのかクラス全体で考える場を設けた。児童から「保存会会員の方に話を聞いたらどうか」という提案が出た。そこで、実際に保存会の方をお招きし、保存会の取り組みなどについて話を聞く機会を設定した。「夢中」の段階で問題解決的な学習に取り組むことによって、現在、両保存会が抱える一番大きな問題に、祭りに携わる人々の高齢化や若者離れが進み、存続が危ぶまれていることを知った。この危機をどのように解決していくか考える場を設定し、単元の終末に「もっと」として位置づけた。地域に対する愛着をゆさぶることで、児童たちが両保存会の抱える問題を自分事として捉え、自分たちができることを考えることができた。

(2) 前時の気づきや疑問を解決できる授業展開になるように、振り返りの視点を⑦「わかったこと・できたこと」 ⑧「新たな課題・次に考えたいこと」と明確にし、児童の思考の変容が見えるようにする。(手だて②の検証)

資料2は「棒の手やおまんと祭について調べよう」の段階の一人調べを終えて書いた児童Aの振り返りである。⑦の「わかったこと」として、「棒の手は今から500年前の戦国時代に、尾張、三河の国で発祥した武術ということがわかりました」という記述に対して「田貫の棒の手は、どうかな。」という朱書きを入れた。これは、愛知県の「棒の手」の歴史に目を向けた児童Aに校区の「田貫の棒の手」に焦点を絞って考えてほしいという願いをもったからである。児童Aは次の調べ学習の際に田貫の棒の手の歴史について自主的に調べ学習を進めた。児童Aが朱書きを読んだことで、田貫の棒の手に視点を定め、さらに小学生の参加が始まった時期を調べるなど、調べを進めていった。「わかったこと」から、児童Aの思いを読み取り、さらに新たな視点を与えるような朱書きをすることで児童Aの思考に沿った展開ができたと考ええる。

資料2 児童Aの振り返り

⑦今から500年前の戦国時代に、尾張 三河の国ではしょうしたぶじゅつということがわかりました。

※田貫の棒の手は、どうかな。

さらに調べ学習を進めていくと自分たちでは調べられないことが出てきたため、保存会の方にお話を聞いた。資料3は、その際の児童Aの振り返りである。次時の授業の最初に児童Aの振り返りを紹介したところ、それぞれが聞いたことや調べたことを交流することになった。そして、新しく得た情報から、もっと知りたいという新たな課題

資料3 児童Aの振り返り

⑧保存会の方から話をたくさん聞いてたくさんのがわかった。みんなの意見も聞いて整理したいな。

※ぜひ、聞く時間をとりたいね。

をもつことにつながった。児童Aの振り返りが、クラス全体の課題となり、そこから問題解決的な学習に展開していったことから、振り返りに視点を与え、変容が見えるようにしたことは有効であったといえる。

(3) 体験活動を行った後、互いの考えを交流する場面で、視点を絞るための繰り返し発問や保存会の方々の思いに迫ることができる資料を提示する。(手だて③の検証)

児童Aは、地域の伝統芸能である田貫の棒の手を、インターネットや文献、実際の道具から調べていった。その後、資料3のように友達が調べたことを聞きたいという思いをもった。そこで、クラスで棒の手とおまんと祭について調べてわかったことを「人・もの・こと」の観点で発表した。多くの意見が出たところで、繰り返し発問として、「棒の手とおまんと祭の両方に似ているところはないかな」(資料4下線部)と、問いかけた。繰り返し発問に対して児童Aは「人・もの・こと」の観点ごとにまとめられた板書を見ながら、共通点を資料4波線のように「両方に保存会がある」と発言した。話し合いの後、

児童Aは、ワークシートに資料5のように記入した。友達の意見を聞くことで、どちらも長い歴史があるものだと気づくことができた。繰り返し発問をしたことで、話し合いが深まり、共通点に気づくことができ、そこから双方の歴史に焦点を当てることができた。さらに児童Aは資料5波線のように、長い歴史のある棒の手をもっと調べたいという気持ちが芽生えた。

長い歴史があると気づいたことから、クラス全体が、どうして長い間続いてきたのかについて疑問をもった場面で、話し合いを行った。授業の途中で資料6を提示した。今までの知識では、男の人しか参加できなかったはずの棒の手を女の人がやっている写真を見て、クラス全体が驚いた。児童は、女性も協力しないと棒の手がなくなってしまうという考えをもち始めた。そこで、児童が先人の思いに触れられるように「どうしてそこまでして棒の手を続けていたのでしょうか。」と、問いかけた。すると、資料7下線部のように当時の人の思いを推測し、語り始めた。

「夢中」の段階の冒頭では、100年以上続く理由として「保存会の人や地域の人々が協力しているから」「小中学生が参加しているから」と表面的な考えであり、関わる方々の思いにまで迫れなかった児童が、資料提示によって先人の思いや努力にまで迫ることができた。資料8はその際の児童Aの振り返りである。「大切にたくさんの人の思いがつながれてきた」という人々の思いにまで触れることができたことがわかり、資料提示は有効であったといえる。

資料4 繰り返し発問

T: 黒板いっぱいみんな調べた「棒の手」「おまんと祭」の意見が出ました。

T: 「棒の手」と「おまんと祭」の両方に似ているところはないかな。

児童A: 両方に保存会があるよ。

C1: 140年も前からやっているね。

C2: 人が少なくなっているね。

C3: 140年以上続く地域のためだね。

資料5 児童Aのワークシート

⑦C3さんの意見を聞いて、確かに、棒の手もおまんと祭も長い歴史のあるものだったと思った。

140年以上ってすごいね。なにかひみつがあるかな。

※長い歴史の中にどんなことがあったんだろうね。



資料6 戦時中女の人々が棒の手の舞をする写真

資料7 写真を提示した後の授業記録

T: どうしてそこまでして棒の手を続けていたのでしょうか。

C1: 自分の身を守るためだと思う。

A: 絶対お祭りをやめたくないと思ったから。

C2: 棒の手を先に残していきたいと思ったから。

C3: 棒の手を残したいと思ったけど、男の人は戦争に行ってしまう、残った人がずっと大切にしていたお祭りがなくなると悲しいと思ったからやったと思う。

資料8 児童Aの振り返り

⑦戦争などで続けていくことが大変でも今まで続けているのは、それだけ大切にたくさんの人の思いがつながってきたことが分かった。

※現在まで続けていることはとても大変だったんだね。それでも続けた思いの先には何があるのかな。

(4) 保存会の方々の思いに気づけるように、地域のたからである田貫の棒の手、中畑のおまんと祭に関わる方々の受け継いできた思いや大切にしていることを語ってもらう場を設定する。(手だて④の検証)

保存会の方々に来校していただき、棒の手やおまんと祭に対する思いを話していただいた。導入から関わっていただくことで、児童は地域の郷土芸能やお祭りに対する思いを高めていった。保存会会

員で西尾市文化財課の浅岡さんに話を聞いて、保存会の方だけでなく地域の人みんなで協力して祭りを開催していることや、魅力を伝えるためにさまざまなイベントに参加をしていることなど、たくさんの方がわかった。児童Aだけでなく多くの児童が、自分たちの疑問に答えてくれる保存会の人や長い歴史がある棒の手、おまん和祭を守る人たちの取り組みに興味をもった。この授業を通して児童Aは資料9のように「実際に教えてもらえてうれしかったし、貴重な時間だった」（二重線）と振り返りに記入した。直接、保存会の思いを感じることができたことをうれしいと感じ、話を聞いたことをありがたく感じていることがわかる。保存会の方々の思いを知り、その価値やよさに気づいたことで、地域の人への感謝の思いをもつことができた。

資料9 児童のA振り返り

⑦歴史や保存会のことわかった。調べるよりも、話を聞く方がわかりやすかった。浅岡さんは棒の手のために、何年か一生けん命やっいてすごいなと思った。実際に教えてもらえてうれしかったし、貴重な時間だった。
※実際に聞かないとわからないこともあるね。

(5) 棒の手、おまん和祭存続のために、自分にできることが考えやすくなるように視点を分けて板書したり、発信方法を考える場を設定したりする。（手だて⑤の検証）

地域の人々の努力によって、どちらの行事も100年以上続いているということに気づいた児童たちは、棒の手とおまん和祭を「地いきのたから」だと考えた。しかし保存会の浅岡さんの話などを通して、棒の手とおまん和祭を継続していくためには、課題があることも知った。「棒の手とおまん和祭を未来に残すために自分たちにできることを考え、できることから始めよう」と多くの児童も同様の考えをもっていた。その後クラスで意見交流を行った。資料10はその際の板書の一部である。切り返し発問や話し合いの後に自分たちにできることの意見が少ないと予想していたため、「自分たちにできること」「大人の力をかりてできること」を分けて板書した。「自分たちにできること」を増やしていく計画であったが予想以上に「自分たちにできること」が意見として出てきた。このことから、視点を分けた板書を基に話し合いを行ったことで、解決策を自分事として考えることにつながったと考える。

資料10 「自分たちにできること」を考えた際の板書の一部

棒の手やおまん和祭がつづいていくためにどんなことができるだろう。

自分たちにできること

- ・チラシを配る。
- ・学校でポスターを作る。
- ・子どもが参加する。
- ・たくさん応援して元気を出してもらう。
- ・クイズをつくる。
- ・ポスターをはる。（学校、地いき、保育園、魚しょう）
- ・地いきの人に参加をお願いする。
- ・みんなでお祭りに行く。

大人の力を借りてできること

- ・全地いきにポスターをはる
- ・交通（バスなど）をよくする。
- ・お金をかせぐ。
- ・せんでんする。
- ・CMをつくる。
- ・広報「にしお」にのせてもらう。

児童Aは高齢化や祭り離れなどの問題を解決するために、たくさんの人に棒の手、おまん和祭を知ってもらおうと、「自分たちで新聞やクイズをつくりたい」と、地域の人に発信する方法を提案していた。地域が抱える問題を知ってもらうことが、棒の手、おまん和祭を守ることにつながると考え、自分たちの思いを発信したいという考えが伝わってくる。そこで、新聞を作る際に読み手に興味をもってもらえるようにキャッチコピーの作成を提案した。資料11は新聞を作成する際に、児童Aが書いたキャッチコピーである。児童Aは「100年以上も続いている。だからこそ残したい。戦争も乗り越えた！続けていきたい！」というキャッチコピーを考えていた。自分自身で調べた知識をもとにしたポスターや新聞を使って、自信をもって田貫の棒の手、中畑のおまん和祭を紹介しており、地域に愛着をもち、自分ができることをする児童Aの姿が見られた。

資料11 児童Aのキャッチコピー キャッチコピー

- ・100年以上も続いている。だからこそ残したい。戦争も乗り越えた！続けていきたい！
- ・みんなに知ってほしい。楽しんでほしい。残したい。次の世代につなげたい。

発信方法を工夫し、自分たちの思いをポスターや新聞という形で伝えることで、あたりまえだと思っていた地域の伝統文化である棒の手、おまんと祭の価値やよさを再発見し、「自分たちにできること」を考えるなど、地域に誇りと愛着をもつことにつながったと考える。

5 研究のまとめ

(1) 仮説1について

資料8のように児童Aが「大切にたくさんの人の思いがつながれてきた」という人々の思いにまで触れることができたのは、交流する場面での資料提示や、前時までの児童の振り返りから次の学びを展開していったからである。さらに、「わくわく」の段階で本物に触れる感動、目の前で起こるできごとへの驚きなどが、振り返りに記述されていたことから、教材との出会わせ方を工夫したことは有効であったといえる。本単元は、驚きや感動の出会いから単元をスタートすることで、「夢中」の段階で児童が「自分で調べてみたい」「なぜだろう」と追究意欲をもって単元を進めていくことができた。棒の手、おまんと祭との出会いによって、もっと知りたい、他はどうなっているのだろうという新たな疑問を生み出し、自ら学ぶ姿につながるものが検証されたといえる。「もっと」の段階では、自分たちが気づいた棒の手やおまんと祭が抱える現在の問題に気づき、何とかしようという思いをもち、行動につなげることができた。こうした姿から、仲間とともに試行錯誤しながら自らその問題を解決していこうとすることができたといえる。

(2) 仮説2について

児童Aは新聞作成の際に、下書きで「100年以上も続いている。だからこそ残したい。戦争も乗り越えた！続けていきたい！！」というキャッチコピーを作った。それは、知らないうちに誰かがやっていると思っていた棒の手やおまんと祭は、毎年あたりまえにあるものでなく、保存会をはじめ、地域の人の思いに支えられて行われているという事実気づいたからだと考えられる。自分たちを支えてくれる中畑の人に感謝し、地域の一員としての自覚をもったからこそ、中畑のためになることをしようと考え、ポスターや新聞等を作成していくことができた。完成したポスターや新聞には、中畑の人・もの・ことのよさや価値に気づき、誇らしく思う気持ちが表れており、地域への愛着が深まったといえる。

6 今後の課題

「田貫の棒の手」「中畑のおまんと祭」は、どちらも100年以上続くものであるため、文献には難しい言葉や漢字が多く使われている。当時の文献に触れることは、長い歴史を実感するためには有効だと考え、本研究では、言葉や漢字を調べることで一人調べの学習に組み込んでしまったが、4年生が長い歴史を感じるには、写真や体験、質問会で十分であった。今後も児童に適切な指導方法を研究していきたい。

7 おわりに

本単元では、地域の郷土芸能「田貫の棒の手」、地域の祭り「中畑のおまんと祭」を題材に問題解決的な学習を展開した。祭りに関わる方の高齢化や若者離れという問題を解決しようと、祭りに関わる人々の願いや努力を聞いたことで、児童が自ら行動する姿が見られた。地域の伝統を引き継ぎ、次世代に継承していくために新聞等の作成をする児童の姿から地域に愛着をもつ姿が見られた。あたりまえのように感じていた棒の手、おまんと祭がなくなってしまうかもしれないと思ったとき、まちがいなく自分たちにとっても、地域にとっても必要な存在であり、残していきたい「地いきのたから」だと気づくことができた。地域と手を携えて取り組んだ実践を通して、児童は、地域の一員として伝統を自信と誇りをもって盛り上げようとした。中畑校区が「地いきのたから」に恵まれており、その教材で教育活動を展開できることを誇りに思い、今後も「自ら学び、ふるさと中畑に誇りと愛着をもつ児童の育成」に力を注いでいきたい。